

歴史の中の女たち

＜第6回＞

解放者を解放した女：マヌエラ

伊 藤 滋 子

ラテンアメリカ諸国をスペインから独立させた英雄シモン・ボリバルは自ら解放者と名乗った。その愛人であったマヌエラは、彼の命を救ったことからそう呼ばれた。

「私の国はこのアメリカ大陸です。赤道の下に生まれました」と彼女自身が書いているように、マヌエラ・サエンス・アイスプルは1797年頃、エクアドルのキトに生れたが、その出生からして波乱含みであった。母のアイスプル家はキトの名家だが、スペイン人の役人であった父はすでに別の女性と結婚していた。しかも母は間もなく亡くなり、困った父は残された娘を僧院に預ける。そして3、4才になった頃父の家庭に引き取られ、継母にも可愛がられて、他の兄妹とともに恵まれた幼少時代を送った。父は子供たちに尼僧の家庭教師をつけて読み書きを学ばせたので、利発なマヌエラは、ギリシア・ローマの古典にも通じ、英語、フランス語を話すことができた。十代に入ると、彼女に生涯付き従うこととなるナタンとジョナタンという二人の黒人の召使いを伴って母方の田舎の荘園で過ごすことも多かった。大自然の中を自由奔放に馬で駆けめぐり、葉巻を吸うことまで覚え、その上才気に満ちていたのだから、普通の家庭の主婦として収まりきれんはずがない。

13才の時の衝撃的な体験が彼女の人生を変えた。継母に連れられて、スペインからの

独立を叫んだ人々がキトの中央広場で処刑されるのを目撃したのだ。南米でも最も早い独立の芽生えであった。処刑者の首は見せしめのために何日も広場に晒されたが、それは却って市民の王権に対する反感をかき立て、強烈な印象を受けたマヌエラも15才で革命をめざす愛国者のグループに加わり、地下活動を始めた。21才の時父に連れられてパナマへ行った際、彼女の美しさに魅せられたイギリス人商人ジェームス・ソーンから求婚され、翌年彼が本拠にしていたペルーのリマで結婚する。マヌエラはリマでも副王政府打倒をめざす組織に入り、大商人の妻という立場を利用して、社交界で政治情勢を探り、秘密の手紙を届けるといった活動を続けた。彼女があげた最大の功績は、兄のホセ・マリアが所属する副王軍の部隊を革命側に寝返らせたことである。南米諸国の独立をめざしてアルゼンチンから遠征してきたサン・マルティン将軍はそれを聞いて非常に喜び、彼女に勲章を贈った。マヌエラはサン・マルティンの愛人ロサが同郷の人だったことから親交を結び、将軍の習慣や性癖を知るようになったが、後に思いがけずそれが役に立つこととなる。

マヌエラは大商人の妻として何不自由ない生活を保証されていたが、夫とは年令が倍も違う上に、性格的にも合わず、理解しあえたと感じることはなかった。実母の家で遺産

相続の問題が生じたのを機に、夫の許しを得て5年ぶりにキトに戻る。折りしもキトは風雲急を告げていた。ベネズエラ、コロンビアを解放したボリバルの腹心、スクレ將軍がエクアドルの解放をめざしてキトに迫り、ペルー副王派遣の王軍と小競り合を続けていた。マヌエラは革命軍に志願したが、女だからと入隊を断られた。それでも諦めず、後方で負傷者の手当てや食料の補給などをし、また召使いのナタンとジョナタンに敵軍の位置や戦力を探らせて、その情報をスクレに報せ、あるいはロバ5頭分の食糧を寄付したりして協力した。そしてついに1822年5月25日、スクレはピンチャの戦いで王軍を破り、喜びに沸くキト市民は、解放者ボリバルが到着して共和国が名実ともに確立されるのを待った。

1822年6月19日、いよいよその日が来た。ボリバルが市内に入城、市民の歓呼に応えながら町を行進した。マヌエラも継母や姉妹とともに狂喜しながらバルコニーから手を振った。この時彼女が投げかけた花束が馬上のボリバルの胸元に当り、彼女は青くなったがボリバルは微笑を返してきた。その夜の祝賀会でボリバルは彼女を紹介されると、「私の胸に花束を命中させて火をつけた方ですね。兵士たちが皆、貴女ほどの腕前なら、いかなる戦いにも苦労しなかったことでしょう」と言って彼女を赤面させた。ダンスの名手のボリバルは彼女を踊りに誘い、「きょう貴女は私の心臓を射止めました。貴女は優雅で魅力的であるばかりではなく、勲章をもらうほど勇敢な方だそうですね。この町でそのような方

にお会いできるとは、思いがけないことです」とささやいた。崇拜する英雄からこのような言葉を投げかけられたマヌエラは喜んで彼の愛を受け入れ、この瞬間からボリバルが死ぬまでの8年間、強い絆で結ばれたのである。

2日後、初めてふたりだけで会ったボリバルは、いかなる女性を相手にしているかを知り驚く。彼女はギリシア、ローマ時代の作品に精通し、数多くの書物を読み、男と同じように政治や戦術について論じることができたのだ。彼は知性と教養と美貌を兼ね備えた女性を前にして、たちまち心を奪われた。一方マヌエラは彼の眼差しや表情に時おり表れる暗い翳を見て、彼が栄光の頂点に立ちながら、心の奥底では愛に飢えているのを感じた。ボリバルはベネズエラの大農園主の家に生まれたが、幼くして父母を亡くし、20才でスペイン人の貴族の娘と結婚したがすぐに妻を亡くし、二度と結婚しないと心に誓って、39才の今までその時々恋に身を任せて過ごしてきた。

この時ボリバルがキトに滞在したのは18日間だけだったが、二人は逢瀬を重ねて愛を語りながら、同時に政治、軍事、外交の問題について話し合った。ボリバルはここからグアヤキルに赴き、サン・マルティン將軍と会見することになっていた。サン・マルティンはグアヤキル港をペルーに併合しようとしていたが、ボリバルは当然大コロンビア（コロンビア・ベネズエラ・エクアドルを合せた共和国）に属すると主張し、また一部のグアヤキル市民は独立港となることを望んでいた。ボリバルはグア

ヤキル市民が自主的に自分を選ぶまでは入城しないつもりでいたが、マヌエラは、「市民の前に姿を見せて、大コロンビア共和国の庇護のもとに、あなたが自らその港と地方全体を軍事的、政治的に支配すると約束なされば、まだ態度を決めていない人々も心を動かされ、あなたに従うことでしょう」と助言し、サン・マルティンの気質を詳細に伝え、「おそらく彼は自ら身を引くことでしょう」と言った。結果は彼女の言葉どおりとなり、ボリバルは改めて彼女の洞察力の鋭さに驚くのだ。以来マヌエラはボリバルの欠かせない相談相手となった。

このあとボリバルはペルー解放のためにリマに赴いたが、そこからマヌエラに軍に入るように誘った。リマで一兵卒となった彼女は軍服を着て司令部で働き、すべての書類の管理を任される。すなわちあらゆる情報が彼女のもとに集まってくるのだ。その中で彼女は、ボリバルの代理としてコロンビアを治めている副大統領サントアンデルが、ペルー解放を目ざすボリバルを妨害しようとしている動きをつかみ、彼に忠告するのだが、ボリバルは取り合わない。彼女はさまざまな手を打ってサントアンデルの介入を防いだ。そして軍の規律のもとで働くことを学びながら、熱心に仕事に取り組み、徐々に昇進していく。任務に没頭するあまり、ボリバルとの愛を育む時間を惜しんだしっぺ返しがきた。ベッドの中に自分の物ではない耳飾りを見つけたのだ。半狂乱となった彼女はボリバルに噛みつき、彼はその夜 10 通もの手紙を書いて謝った。のちに部下に耳に残った歯形を示しながら、「マヌエラからもらったトロフィーだ

よ。この一件のあと、われわれの愛は却って深まった。どちらも静かな夫婦のような生活を送れる性格ではない。考えてもみたまえ。結婚した女が一兵卒となって、戦いから戦いへと渡り歩き、捨て身の献身と功績で中尉、大尉と昇進し、ついには大佐にまでなったのだ。これは決して私の影響力ではなく、全く彼女独自の力によるものだ」と語った。

マヌエラが大佐に昇進したのは、1824 年末、スクレ將軍がアヤクチョの戦いで勝利し、ペルーにおけるボリバル軍の勝利が決定的となった時である。スクレの部隊にいた彼女は、戦場の場に近づくなというボリバルの厳命にもかかわらず、最前線で補給や負傷者の手当てに奔走した。その功績を認めたスクレは彼女に大佐の位を申請したのである。ボリバルがペルー、アルト・ペルー各地を転戦した 3 年ほどの間、別々の部隊に属していたふたりはほとんど会う機会がなかったが、頻繁に手紙をやり取りして愛を確かめ、政情を語り、作戦を練った。ボリバルはペルーとアルゼンチンの間の力関係を考え、アルト・ペルーにどちらにも属さない新しい国をつくったが、手紙によると、それはマヌエラの提案によるものであった節がうかがえる。その国はそこを解放したボリバルを讃えてボリビアと名づけられ、スクレが初代大統領に就いた。

1827 年末、ボリバルとマヌエラは大コロンビアの首都ボゴタに戻る。副大統領サントアンデルはこれまでもペルーで戦うボリバルに全く協力せず、マヌエラが目の仇にしてきた人物である。もとよりボリバルの帰還を喜ばずもなく、両者の反目が始まった。マヌエラはボリバルの誕生パーティーの席上、招待



客の面前でサンタンデルに見立てた人形を兵士たちに銃殺刑にさせた。抗議を受けたボリバルは「彼女流のただの冗談だよ」と軽く受け流したが、すぐに反撃がきた。祭りの日、敵はボリバルとマヌエラの巨大な人形の仕掛け花火を作って爆発させようとした。これを知ったマヌエラはナタン、ジョナタンを引き連れて広場に駆けつけ、女3人して馬で人形を踏みにじって壊してしまった。

反目はエスカレートし、ついにボリバル暗殺が企てられる。が、それを阻止したのはやはりマヌエラであった。仮装舞踏会での暗殺計画を事前に察知した彼女はボリバルに出席しないように言うのだが、聞き入れてもらえない。仕方なく彼女は思いきり淫らな仮装で会場に現れ、ボリバルは恥ずかしさのあまり早々にその場を引き揚げ、難を逃れた。寝室に数人の暴漢が侵入して来た時には、物音を聞きつけたマヌエラがボリバルを窓から逃がして一人で暗殺者たちに立ち向った。ボリバルは橋の下で寒さに震えながら一夜を明かした。この事件で14人が処刑され、黒

幕のサンタンデルはついに国外追放となる。

しかしこの頃すでにボリバルは病魔に冒されていた。彼が解放した国は次々と離反していくが、もうそれを押しとどめる力もない。大統領職を退き、病氣治療のためヨーロッパに渡ろうとカルタヘナの港へ向ったが、病状は悪化する一方だった。彼女が同行せずボゴタに留まったのは、ボリバルがこれまで築いてきたものを守ろうとする使命感からだった。彼は1830年末、「アメリカを治めることはできない。革命に尽くした人はただ海を耕したにすぎない」という言葉を残して死んだ。47才であった。マヌエラに来てほしいと切々と訴える数通の手紙は痛々しく、胸を打つ。彼女はボリバルの元に駆けつけようとしたが、旅の途中で訃報を知った。

マヌエラは大統領に返り咲いたサンタンデルに追放され、故国エクアドルからも入国を拒否され、各地を放浪したあげくペルー北端の砂漠にあるパイタに落ち着く。時おりアメリカの捕鯨船が立ち寄るだけの、ただ一本の通りしかないうらぶれた港町だが、そこがエクアドルに一番近かったからだ。彼女は *Tobbaco, English Spoken, Manuela Sáenz* と看板に書かれた小さい店を開き、貧困と孤独に苛まれながら暮らした。夫はリマに戻るよう言ってきたがそれも断る。そして1856年末(60才?)ジフテリアで死亡し、家、持ち物などすべて衛生局の手で焼かれたが、駆けつけた友人が灰の中から日記や彼女が大切に保存してきたボリバルの手紙などの書類を救ったのである。本年5月25日の独立記念日、エクアドル大統領はマヌエラに將軍の位を贈り、その功績を讃えた。(いとう・しげこ)